

Title	経済学における農業経済学の体系およびそのD.D.C.における諸問題(1)
Author(s)	赤岩, 金太郎
Citation	北海道教育大学紀要. 第一部. B, 社会科学編, 20(2): 57-64
Issue Date	1970-01
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/4355">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/4355</a>
Rights	

# 経済学における農業経済学の体系および その D. D. C. における諸問題（I）

赤 岩 金 太 郎

北海道教育大学岩見沢分校経済学教室

Kintaro AKIWA: A Systematic Consideration of Agricultural  
Economics as a Branch of Economics and Related Problems  
Regarding its Situation in Dewey Decimal Classification (I)

目	次
A 経済学における農業経済学の系統的位 と体系 (1) 科学の分化と統合	(2) 農業経済学の系統的位 (3) 農業経済学の体系と展開

## A. 経済学における農業経済学の系統的位と体系

### (1) 科学の分化と統合

端的には、科学 (Science, Wissenschaft) とは、「具体的な事象と、それを統一する普遍的な法則とについて、客観的な真理を認識し、また、それを応用する体系的な学問<sup>1)</sup>」とすれば、科学は、研究の対象または方法によって、異なる分類が行なわれる。自然科学と精神科学、自然科学と歴史科学、自然科学と文化科学、自然科学と人文科学、自然科学と社会科学などである。近來、人間科学ということもいわれるようだが、未だ定着したものとはいえない。哲学と科学と同様な確実性をもつべきだという考え方があるが、通常、「科学は、哲学と区別され、科学や哲学を総称的にとらえて学問とする。」<sup>2)</sup>

自然科学 (Naturwissenschaft) に対して精神科学 (Geisteswissenschaft) を研究の対象のうえからとらえる Wilhelm Wundt (1832-1920)<sup>3)</sup> においては、自然に対して精神が本質をなしているのが人間や社会であると考え、精神過程の学 (心理学など)、精神所産の学 (法律学、経済学など) および歴史学を、精神科学として総括し、その基礎は心理学であるとした。これを表示すれば次のごとくである。

学 問	純粋形式科学 (心理学) (先験的思惟構成)			
	経験的実質科学 (経験的加工組織)	自然科学		
		精神科学	精神過程学 (心理学など)	
			精神所産学 (法律学、 経済学など)	
		歴 史 学		

経済学における農業経済学の体系およびそのD, D, C.における諸問題（I）

Wundt の考え方に反対して、研究方法の相違のうえからとらえる Wilhelm Windelband (1848-1915)<sup>4)</sup> は、自然科学は反復できる一般的な法則をたてることをその方法とするのに対し、歴史科学 (Historische Wissenschaft) は反復できない一回的、個性的なものの記述を方法とすると考えた。表示すればつぎのごとくである。

学 問	先験科学	
	経験科学	自然科学 (法則定立的) 歴史科学 (個性記述的)

Windelband の考え方を発展させて、同じく、研究方法の相違から考え、自然科学に対して文化科学 (Kulturwissenschaft) をとりあげる Heinrich Rickert (1863-1936)<sup>5)</sup> も、対象の一般性と個別性に注目し、前者を経験的普遍法則に、後者を先験的文化価値にそのよりどころをとらえた。次のごとくである。

学 問	先験科学	
	経験科学	自然科学 (経験的普遍法則)
		文化科学 (先験的文化価値)

自然的世界に対し、人文的世界が対立するとした恒藤恭 (1888-1967)<sup>6)</sup> は、研究対象のうえから、自然科学に対し、人文科学 (Human Science) をとりあげた。精神と文化とをとともにふくんだものとして考え、人間世界の事物を対象として取り扱う経験科学であるとした。つぎのごとくである。

学 問	哲 学	一般哲学			
		特殊科学			
	科 学 (実証科学)	形式科学 (観念科学)	形式論理学		
			数 学		
		経験科学 (実質科学)	広義の自然科学	無生物科学	狭義の自然科学
				生 物 学	
			心 理 学		
人 文 科 学	社 会 学				
	文化科学				
		史 学			

恒藤恭の考え方を補正して、住谷悦治博士も、研究対象のうえから、社会科学 (Social Science, Sozial Wissenschaft) をとり、人間を社会のなかでとらえる。「世界が自然と社会より成り立っているという立場から、自然を対象とし自然法則を研究定立する科学を自然科学に総括し、人間世界の事物を対象として取扱う経験科学、別言すれば社会法則を確立する科学を社会科学と呼ぶ<sup>7)</sup>」とし、「科学 (Science, Wissenschaft) は、一般に自然 (Nature, Natur) を研究対象とする科学としての自然科学 (Natural Science, Naturwissenschaft) と社会 (Sozial, Society, Community) —人間の集団 (group) の現象—を研究の対象とする社会の科学 (Social science, Sozialwissenschaft) とにわけられる。」<sup>8)</sup> という。つぎのごとくである。

学 問	哲 学	一般哲学			
		特殊科学			
	科 学	形式科学			
		経験科学	広義の自然科学	無生物科学	狭義の自然科学
				生 物 学	
			心 理 学		
広義の人文科学	社会科学（経済学，政治学，商業学）				
人文科学（文化科学，倫理等狭義の人文科学）					

ところで、自然科学も社会科学も、それらは分化してきており、今後も、真理をきわめようとする研究の止まないかぎり、均質・単純のものから異質・複雑のものにわかれる意味において、分化 (differentiation) をより進めていくであろう。あるいは限りなく進められるとっていいであろうし、それが科学の発展であろう。他面において、科学の統合が要求せられる。個別化したものをあわせまとめる意味で、統合 (integration) は、分化が進められるに伴ってともに求められる必然をもつ。Cybernetics とか、Information Theory とかといわれるものは、多くの分野の諸科学の統合が期待されるものであろう。宇宙の開発が行なわれるようになった現実も科学の統合がこれを可能にしたものといえよう。自然科学、社会科学を問わず科学のいずれにおいても同様である。

科学の分化と統合とが、相反するようでありながら、ともに科学研究の必然の方向であるなかで、諸科学の地位を見定めることは、それぞれの分化する方向をとらえる拠点 (point) となろうし、それぞれを統合する関連の契機 (moment) となろう。この意味において、農業経済学の地位は見定められねばならない。

Rickert が「科学の<統一性>は決して科学の全部門の一様性であってはならぬ。何となればあたかも世界が多様であるように、科学も多様な目標を立て、それに到達すべき種々の方法を完成するとき初めて此の世界の各部分を全部包含することができるからである。統一性と多様性とは結局<正しく解すれば>方法論に於ては何ら排斥し合う対立ではない。科学の最上の統一はむしろ、多くの多様な部門を結合してそれ自身に完全な<有機体>とする統一であろう<sup>9)</sup>」といていることは、このことに関して重要である。

註

- 1) たとえば、学研新世紀大辞典
- 2) たとえば、恒藤恭，学問の分類
- 3) Wundt, W. System der Philosophie, 1889
- 4) Windelband, W. Lehrbuch der Geschichte der Philosophie, 1891 (1954 15Auff.)
- 5) Rickert, H. Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft, 1899 (1926, 7Auff.)  
リッケルト，文化科学と自然科学，佐竹哲雄・豊川昇訳，昭和14年（昭和42年，第19版）
- 6) 恒藤，前掲書
- 7) 住谷悦治，社会科学論，1968，160頁
- 8) 同書，119頁
- 9) リッケルト，前掲訳書，10—11頁

(2) 農業経済学の系統的地位

社会科学も特殊性を追求して多くの分科を分ち、その意味で、社会諸科学 (Social Sciences)

経済学における農業経済学の体系およびそのD. D. C. における諸問題 (I)

であり、社会学、法律学、政治学、経済学、歴史学、教育学、言語学、道徳、芸術、思想等社会的諸現象を研究する諸部門を含む。しかし、それぞれの分野はとくに抽象されうるに止まり、現象的には密接に関連して分ち難い。

「経済学」<sup>1)</sup> に述べられているように、

「経済学は、……社会を解剖してその生理その病理を明らかにしようとするもので、……しかもその社会の人間関係とその生活物資に関する面の現象において研究するものである。」<sup>2)</sup> と経済学をとらえるとき、社会諸科学の一分科をなす経済学は、他の諸分科に対してどのような地位を占めるか。

Karl Marx は、

「人間は、その生活の社会的生産において、自分の意志から独立した特定の、必然的な諸関係を、すなわち、かれらの物質的生産諸力の特定の発展段階に対応する生産諸関係を取り結ぶ。この生産諸関係の総体が社会の経済的構造をかたちづくる。この経済的構造は、法律的ならびに政治的上部構造がよって立つ現実的な土台であって、特定の社会的意識諸形態もこの経済的構造に対応するのである。物質的生活の生産様式によって、社会的、政治的および精神的生活過程一般がどうなるかがきまる。」<sup>3)</sup> とする。

社会科学という建築において、経済学は、他の部門に対して土台となり基礎的構造を形造る。政治学、法律学等はそのうえに立って上部構造をなすという関係において社会科学建築の構成がとらえられている。そこに、なお社会科学における経済学の地位がうかがわれる。

「経済学」では、またつぎのごとく述べられている。

「しかし、広く経済問題については、右のような固有の経済学のほかに、もっと広い意味での経済学がある。それはまたいろいろの分科をもっているが、たいていは技術学である。すなわち固有の経済学の知識を技術に応用して、いわゆる実用に供するものである。家政学、会計学、経営学、財政学などはこれである。それぞれ家計、企業、国家、等の個別経済に関する技術学である。それは一定の目的を前提する点で技術学であって学ではない。このほか、国家、またはその政治のプリンシプルを前提して、経済に関する政策を論ずるものとして、経済政策等 (economic policy, political economy) がある。それは工業政策、商業政策、農業政策 (農政学)、交通政策、社会政策 (労働立法)、財政政策等の分科をもつ。これも政治的な技術学である。経済学からいえばその応用である。」<sup>4)</sup> この関係を表示すればつぎのようである。

	固有の経済学		
広義の経済学	応用の経済学	技術学	家政学——家計の個別経済 会計学——企業 “ 経営学—— “ “ 財政学——国家 “ など
		経済政策学 (政治的な技術学)	工業政策 商業政策 農業政策 (農政学) 交通政策 社会政策 (労働立法) 財政政策 など

この表では、体系として固有の経済学の分科が示されておらず、応用の経済学でも分科が尽されていないから諸分科の関係は詳らかでない。農業経済学の独立分科もえられていないが、応用の経済学の一分科と見て、農業経済学＝農業政策とうけとられているとすると、その地位は略見定められる。しかしその体系は認められない。

「農業経済学の基礎理論」<sup>5)</sup>では、一般経済学から分科した特殊理論経済学の一として農業経済学を取りあげる。そして、「農業経済学入門」<sup>6)</sup>は、広義の経済学を分科して、経済哲学、狭義の経済学と応用経済学の3とし、それら一般経済学に対応して特殊経済の農業経済学の各部門をとらえる。これを一括したのが次表である。

総称名辞としての経済学 (広義の経済学)	(1) 経済哲学		
	(2) 統一的名辞としての経済学—経済科学 (狭義の経済学)	理論経済学	一般理論経済学 (経済原論)
			特殊理論経済学 農業経済学 工業経済学 商業経済学 .....
	経済的歴史学	経済学史	
		経 済 史	
	(3) 経済的実践学	経済政策学	一般経済政策学
特殊経済政策学 農業政策 工業政策 商業政策 .....			
経 営 学	一般経営学		
	特殊経営学	農業経営学 工業経営学 商業経営学 .....	

前表と後表と両者は相似ているが、とくに、理論と応用（技術）とを分っている点は共通である。相異なる点はとくに農業経済学の地位のとらえ方である。前表では、農業経済学が経済学のなかで一般化されてその地位は見出されていないと受取られるが、後表では、一般経済学のなかにあっても特殊化されて、独立の科学として農業経済学の地位がとらえられ経済学の諸分科に対応的に見出されていることである。それは経済学に重点をおいて、とらえた農業経済学の地位といえよう。農業経済学に重点をおいて、経済学のなかの特殊分科として地位を見出すならば、それは、農業経済学の諸分科が統一されて単独の地位がとられ、そこに体系が抱擁されることになる。

農業経済学が経済学との関連でいかにとらえられるものかについては、すでに、別に<sup>7)</sup>ふれたところである。要すれば、農業経済学は、土地所有ない地代理論に基づいて、経済学の諸分科に対して本質的に特殊であり、経済学体系において独立分科するものと考えられることである。そのうえから、経済学における農業経済学は独立的に系統的地位とその体系がえられてよいとい

える。

註

- 1) 大内兵衛, 経済学, 1952
- 2) 同書, 22頁
- 3) Karl Marx: Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, (Rohentwurf) 1857-58 Anhang 1850-59  
マルクス, 経済学批判, 向坂逸郎訳, 54頁  
(マルクス・エンゲルス選集7, 昭和34年)
- 4) 大内兵衛, 前掲書, 22-23頁
- 5) 久保田明光, 農業経済学の基礎理論, 1949, 第1-2章
- 6) “ 農業経済学入門, 1949, 第3章
- 7) 拙稿, 経済学と農業経済学との関連, 北海道教育大学紀要(第1部B)第18巻 第2号, 昭和43年

### (3) 農業経済学の体系と展開

自然現象を対象とする自然科学に対し, 社会現象を対象とする法則科学の社会科学がある。その社会科学の基礎をなし, 経済現象を対象とする経済学がある。またその経済学の一分科をなし本質的に特殊化する農業経済学がある。農業経済学はかかる系列にあって, 土地所有に基づく特殊性を示すものであるから, 従って, また, 社会科学と経済学の共通性をもあわせもつものである。

このような地位にあって, 農業経済学の体系はどのようなものであるか。

農業経済現象が一般経済現象のなかで共通基盤からとらえられると, 農業経済学としての特殊分科が認められず経済学にふくめられ, 特殊科学として独立分科の地位がえられず, 体系もえられない。例えば, 「経済学」<sup>1)</sup>に見られるところである。そこでは, 一般経済学にふくまれているか, 或いは, 応用の経済学として農業政策にとりあげられているかも明らかでないが, いずれにしても, 独立分科の地位と体系は示されていない。

また, 「農業経済論」<sup>2)</sup>では, 「農業経済学 (agricultural economics) とか, 農業政策 (農政学 agricultural policy) とかよばれる学問が, 経済学の一研究分野であること, より詳しくいえば, 経済政策学の各論を形成する一分野であることは, こんにち一般にみとめられている事実である。……農業経済学というからには, 農業についての経済学的研究, あるいは, 農業という産業分野にあらわれる経済現象の研究がその課題であることは, いちおう問題はないであろう。」と経済学の応用部門で政策としてとらえ, 独立の農業経済学という体系を全く認めていない。

しかし, 「農業経済学の基礎理論」ではこれらと異なる。「農業経済学では, 経験的文化科学としての経済学の認識目的に準拠して農業の一面に農業経済現象を解釈し取り, 其の農業経済現象の諸関係を客観的に記述し説明し, 且つ又これを文化科学的に普遍化する所の経済学の一分科, 即ち特殊理論経済学である。」<sup>3)</sup>として, 経済学のなかに独立の農業経済学をとらえている。そして「農業経済学入門」では, つぎのように述べられる。

「その最も広い意味の経済学は, ……その中でもその経済現象の真実性を認識しそれに関する真理を見出そうとする, 換言すれば, 科学としての任務をもつ部分即ち経済科学と, 経済現象に関して何等か実践的目的の為に必要且つ有用な知識を体系立てようとする, 換言すれば実践学としての任務を担える部分, 即ち経済的实践学とがある。……その意味における経済学を最も広い意味における経済学或いは総称名辞としての経済学と言う。然るに前述した科学としての経済学……は寧ろ統一的名辞, 即ち異った性格の学問部門をその中に含めない, その学問的性格が統一

されているものに冠した名称としての経済学の事であって、……狭義の経済学、否寧ろ経済科学と厳密に呼びたいと思う、……

経済科学の中心を為す理論経済学を一般と特殊に区別したのは、前者が……経済現象一般を取扱うのに対して、後者例えば農業経済学の如く、理論経済学の一般対象中、農業経済現象という特殊部分のみを取扱うからで……ある。それ故一般経済学……の方法や原理は何等根本的に改容されることなく、そのままそれぞれの特殊理論経済学たる農業経済学や工業経済学等の中に移され得るのである。只理論経済学の一般的対象中の夫々の特殊部分即ち農業経済現象、工業経済現象等には、おのずからある特殊性があるものであるから、その限りにおいて夫々の特殊理論経済学の特殊性も生じて来るという程度の差に過ぎないのである。かくて……農業経済学も……その様な特殊理論経済学の一つなのである。それ故農業経済学というのは、農業という人間活動の一面として理解された農業経済現象の真实性を究め、それに関する真理を見出そうとする理論経済学の一部門であるといふことができる。<sup>4)</sup>

この考え方は、固有の経済学を狭義のものとして、他に経済哲学と応用技術学とを対应的に認めて広義の経済学がとらえられており、そのなかで、農業経済学が、狭義の経済学の特殊部門として、各論的な地位が示されている。農業経済学としてその地位はとらえられてはいても、体系が統一的、包括的、かつ序列的な意味をもつものとするれば、明確な体系が示されているとはいえない。このことは農業経済学に重点をおいた体系ではなくて、一般経済学に重点をおいたということにもとづくものであろう。

「農業経済学大要」<sup>5)</sup>ではつぎのごとく述べられる。

「農業経済学の対象が＜農業経済＞という社会現象」である。「＜経済＞現象＝＜価格＞現象」と解すれば、「経済学は当然価格の理論」であって、「農業経済学とは農業に関する価格現象のことであり、農業経済学はかかる価格現象の法則を明らかにする学問ということになる。」「<sup>6)</sup>そして「経済一般を対象とする経済学とは別に農業経済学を設定する所以のものは、単なる便宜からでたものではない。農業によって限定された意味での経済が、他のものろもろの経済現象とは異なる特色をもつものである。この関係を明らかにするのが、農業経済学の任務といってよい。」「<sup>7)</sup>と述べて農業経済学の分類を示す。その「農業経済学の構成」<sup>8)</sup>の表は次のようである。

農業法学 農村社会学 ↓ 経済学— 農業経済学 — ↑ 農業技術学 肥料学 土壌学 畜産学 農業機械学 土地改良学等	総論 農業史 ↓ 原理論 ↑ 統計学 計算学	各 論			
		農業経済の過程による分類	主体による分類	客体による分類	手段による分類
		農業生産経済学	農業経営学	農業労働論 土地経済学	農業金融論 農業財政学
		農業流通経済学 (市場論)	農業協同組合論	畜産経済論 肥料経済論 農業機械化論	農業保険論 農業教育論
		農業消費経済学	農政学 農業開発論	農産物市場論	



## 経済学における農業経済学の体系およびそのD. D. C.における諸問題（I）

ここには、経済学との連繋はとりあげられているが、農業経済学の系統的地位は明示されていない。しかしおよそ農業経済学の体系が一括してとらえられている。ただ体系として、各論の異なる立場の分類が統一され、総論と各論とが統合されることが簡明となろう。それにしても体系の簡明を目的に科学が追求され、分科が行なわれていくものではないところに、体系としての問題があろう。

現代における基本的課題として、農業経済学におけるものを、土地の所有形態をどのように改めるかという意味で「土地所有」の問題と、産業間のバランスを、どのように獲得するかという意味で「産業均衡」の問題があり、経済学においては、生産を高めるにはいかにするかという意味で、「生産方法」の問題と、生活を豊かにするのにどうするかという意味で「生活水準」の問題があり、社会科学としては、合理的に社会の機構をどのように改めるのかという意味で「社会機構」の問題と、平和的に国際関係をどのような姿にするかという意味で「民族」の問題がある等と理解するならば、各、農業経済学、経済学、社会科学の系統的連関の間で、各課題も密接に結び、農業経済学の課題追求には経済学の課題が、経済学の課題追求には社会科学の課題がそれぞれ追求されなくては、それぞれの課題の目標は達せられがたいであろう。農業経済学の地位を見定め、体系をとらえることは、斯学展開の基点となるが、系統的に、農業経済学から経済学、社会科学の見通しもそれらの関連のうえから重要であると知られる。

### 註

- 1) 大内兵衛, 前掲書
- 2) 大内力, 農業経済論, 1967, 3頁
- 3) 久保田明光, 農業経済学の基礎理論(前掲書)18頁
- 4) “ ”, 農業経済学入門(前掲書)27-31頁
- 5) 矢島武, 農業経済学序説(矢島武, 崎浦誠治共編, 農業経済学大要, 第1章, 昭和42年)
- 6) 同書, 1頁
- 7) 同書, 5頁
- 8) 同書, 13頁